

# 学級不適応生徒の指導について

外 山 清\*

学級集団から孤立し、不適応をおこしている生徒をどのようにして集団になじませ、協調させていったらよいかを非行傾向をもつ生徒の場合を例にして、諸検査を通じての資料や、日常行動の観察結果から考察し、お互いの理解を深めるために、相談活動をとおしてできるだけ多く接触の機会をもちながら、一方、その生徒をとりまく集団を利用して生徒同志の話し合いの場をとおして、協調心を育てようと研究し、実践した記録である。

## I 主題設定の理由

学級担任が目標にしたがって学級経営をしていく場合に、いろいろな困難点につきあたるが、学級集団の中に不適応を起こしている生徒、特に非行傾向をもつ生徒の指導には、他の生徒に与える影響も少なくないだけに多くの努力を要し、しかも結果的にはあまり効果がない場合も多くあった。また彼らは概して計画された活動には無関心、無気力であり、むしろマイナスに作用する場合が多い。学級集団も彼らの言動に影響され、まとまりがとれず沈滞したふん囲気になってしまう。また、このような非行傾向をもつ生徒は教師を信用せず、親とも気持ちを通じないまま自分を認めてくれるグループの方へ走ってしまう。そして、周囲のものの目がとどかないうちに意外に状況が悪化していて、手のほどこしようがない場合もでてくる。早期発見、早期治療の原則から、彼らを集団になじませ、またその一員としての自覚をもたせ、健全な行動がとれるようにするために、個々の場合によっていろいろな方法があると考えられるが、教師だけの力では限界がある。学級集団の力や地域の力もかりなければならぬであろう。そして、彼らの心情を理解し、受容し、助言しつつ彼ら自身の内部からでてくる力をのばさなければならぬ。そして集団にまとまりをもたせ、学級の諸活動がより効果的に行なわれるようにしたいと考えて本主題を設定した。

## II 研究の方法

### I 研究の仮説

家庭環境および学校における友人関係、教師および両親との対話不足から、学級集団になじむことができず、自分の考えていることも理解してもらえず、疎外感や劣等感をもつようになり、また自信喪失から学校生活に興味を失ない、集団に不適応を起こしていると考えられる生徒について次のことを留意した。

(1) 彼らの学級内における位置、性格を理解し、彼らとの教育相談をつづけることによりできるだけ接

\* 新潟市立山ノ下中学校教諭

触の機会を多くもち、不満や希望に耳をかたむける。

(2) 学級集団の中にたとえ彼らの一方通行であっても、彼らが人間的つながりを求めている生徒がいると考え、学級内のグループ構成を工夫し安定した気持ちになれるようにする。

以上のように学級内における人間的つながりを深めることにより、自己中心的な考え方から脱し、自分も学級集団の一員であるという考え方を育てていくことができる。

## 2 研究の方法

(1) 対象生徒の実態をよくつかむため、教科担任と学級担任など指導教師同志の観察資料の交換を随時おこない、日常行動をよくみつめる。全校の生徒指導の組織を通じて全職員の共通理解を得る。またソシオメトリックテスト、悩みの調査、矢田部ギルフォード性格検査、学習適応性検査等により対象生徒の概況を知り、生活ノートの提出、教育相談等により問題点をさぐる。

(2) ソシオメトリックテストの結果から、グループ構成を考え、班編成ののち、その反応をみて好ましい班編成にもってゆく。

(3) 相談継続の手がかりがつかめたら、行動を観察しながら教育相談をつづけ、レポートづくりにつとめ、好ましい方向へ助言していく。

## Ⅲ 学級の概況と対象生徒の概況

### 1 学級の概況

2年生の初めに学級編成を行ない、そのまま3年生に進級した学級で、男子20名、女子18名の編成である。全体として、男子、女子ともにおとなしい。リーダーにはめぐまれ、男子、女子ともに全校のリーダー格の生徒もいる。行動面では割合に消極的な生徒が多く、男子は、まとまりがたりないように感じられる。N(対象生徒)とKの2名の学習態度が悪いため学習が妨害され、何か白けたようなふん囲気さえ感じられる。N、Kの態度に反感をもちつつリーダーさえもどうにもならないと思っているらしく、何となく元気がない。多くの生徒が担任に不満を訴え、彼らが欠席するとホッとするらしく、授業もスムーズで、空気も和やかになるようであった。

ソシオメトリックテストの結果、男女あわせて34名が下位集団(I)を形成し、N、Kが相互選択があり2名で下位集団(Ⅱ)をつくっている。学級のほぼ全員が大きな集団をつくり、2名の下位集団と全く遊離してしまっている。また、2名の生徒のために他の大部分がひとつにまとまってしまったともいえる。そして、下位集団(I)と下位集団(Ⅱ)とは互いに排斥しあい、Nは社会的地位得点が-33とほぼ学級生徒全員から排斥をうけている。学級委員長のB10は被排斥数が3で社会的地位得点(SSS)は6、学級だけでなく全校的にもリーダーとしての素質をそなえている。N、Kの2名もB10とは小学校も一緒に第一にB10を選択している。このB10はNには相当の影響をもっているが積極的な働きかけはしない。むしろNがまつわりつくのをうるさがっている気配も感じられる。女子のリーダーであるG21はSSSが11で、学習成績も抜群でやさしい生徒であるため人気があり、N、KともにG21を第2に選択している。

## 2 対象生徒の状況

### (1) N (中学3年)

(2) 問題点 態度，日常行動ともに粗暴で他の人たちと全くなじまない。反抗的で喫煙その他の非行行為もあり，破壊的行動が多い。

### (3) 生育歴と家庭環境

出生時安産で，乳児期，幼児期ともに他の子どもとかわるところがなく，保育所もいやがらずに通った。小学校3年位まで暴力をふるうことはあったが，さして問題もなくきかん坊という程度であった。成績はふるわずほとんど勉強はしていない。小学校4年のとき両親が不和から別居し，兄たちは県外に働きに出，本人は姉と父親の市営アパートと母親の住居との間を往復していたらしい。経済的にも困り，生活保護を受けるかたわら母親は労務者として働きにでた。そのころから反抗的になり学校における態度も急変し，学校生活になじまず欠席も多くなった。母親は学校から注意を受けるたびにしだいに消極的になるだけで，しつける努力をしなかった。ただ姉と比較して当人を非難するだけで気持ちを本当にくみとってやる機会がなかったらしい。姉も中学校から高校へ進学すると自分の弟の学校における態度が気になり，母親と共に当人につらくあたり口論もたえなかった。中学校にはいって父親が病気にたおれ療養生活にはいると，父親の方へ多くいつくようになった。両親とも保護者会には全く出席せず家庭訪問しても会いたがらない。自分の子どもの動向についてひどくひけ目を感じているようすである。

### (4) 家族構成

父親は長い療養生活ののち，45年6月に死去。母親は健在で自由労務。姉は高校生。兄2人は県外で働いている。

### (5) 情緒的な問題

両親の別居によりその間を往復しているうちに，両親に対する不信感をつのらせ，また楽しみのない冷やかな毎日はとてもつらいものであったと思われる。また，家にいてもぐちばかりで不愉快だともらしているし，毎日の不安定な，不満の多い生活ですっかり気持ちがぐずれてしまっている。本人も家出の経験があるといっており，また親に対する侮蔑的なことばからもそのことがうかがえる。人のまごころにふれる機会や，しみじみとした家庭のあたたかさにもふれることがなかったと考えられる。これに加えて，両親が別居したところ，近所の人たちが，冷笑的な態度で本人に接したらしく，おとなに対するはげしい反抗心をもっている。反抗心がつのればつるほど悪者あつかいされ，暴力をふるうことが唯一のよりどころであったのか中学校でも自分がこの学校の番長であると言いふらしていた。そのため他校の非行グループにもつきまとわれる結果になり，ますますおいつめられた気持ちになっていった。

### (6) 学校生活

授業中には奇声を発し，他の生徒の学習を妨害し，教師に対しても反抗的態度を示した。ノート，教科書を全く用意せず，他のことをしていたり，机にふせたり，他の生徒に話しかけたりしている。テストになると，よくカンニングをしたり，教科によっては全くでたらめに答えて信用することができない。1週間に1～2日は腹痛，頭痛という理由で休んでいる。欠席日数1年20日 2年45日 3年40

日運動会、写生会などの行事にはほとんど参加せず、清掃などもさぼることが多い。

田中B式知能検査 SS 41

(表1) 教研式学力検査

教科	国	社	数	理	英	平均
偏差値	27	34	21	37	29	30
段階	1	1	1	2	1	1

(表2) 学習適応性検査プロフィール5段階評価

領域	段階	1	2	3	4	5
1 勉強の意欲						
2 勉強の計画						
3 授業のうけ方						
4 本のよみかた						
5 覚え方、考え方						
6 テストのうけ方						
7 家庭の環境1						
8 家庭の環境2						
9 学校の環境						
10 友人関係						
11 自主的態度						
12 不安傾向						
13 神経質の徴候						
14 具体的健康						

## (8) 対象生徒の分析

学年初めの諸検査、面接や観察の記録の結果、次のように分析した。

- ① 家庭内のトラブルに対する近所の人たちや、自分をとりまくおとなの態度にはげしい反抗心をもっている。
- ② 教師が自分の気持ちを考えてくれないし、すぐかっとなることから級友も自分のことをよく思っていない。学級の中で特別の存在だと考え、劣等感をもっている。
- ③ 勉強してもうまくゆかず級友からも相手にされないの、自然と暴力的なものに安定の方向をみつけていった。
- ④ 家庭内において母親や姉が彼自身の態度をなじることが精神不安定の大きな原因にもなっている。
- ⑤ テスト中にカンニングしたりすることから、まだ自己をよくみせようとする気持ちがあり、指導の手がかりが残っている。

## IV 指導の経過

対象生徒の分析の結果から、次のような指導をすすめた。

### (1) 接しかたについての配慮

家族を含め、周囲の人たちとの対話が不足しているので、授業中、その他の活動時に彼の発言に反応してやることにした。奇声を発しても「N君どうした。」と問いかけ、彼の反応をまった。しかし、その場では反抗心をあらわにして独語するだけであった。そのようなときは深追いしないで、そのつどく

## (7) 諸検査の結果

悩みの調査(1学期の調査)

- 1 勉強してもわからないことが多い。
- 2 勉強する気になれない。
- 3 友人に好かれたい。
- 4 親の職業がいやだ。
- 5 家庭がおもしろくない。親やきょうだいとけんかする。
- 6 すぐかっとなるのでこまる。
- 7 何のために生きているのかわからない。
- 8 先生はもっと生徒の希望をきいてほしい。

矢田部ギルフォード性格検査 AB型

ソシオメトリックテスト

N,Kと2人で相互選択があり、1つの下位集団をつくり、学級集団から全く分離している。

りかえすようにした。できるだけ一般生徒と平等に應對し特別あつかいしないように注意をすることにした。また、ほめることがあったら遠慮しないでほめることも忘れてはならないことと思われる。適切なほめかたは効果がある。

## (2) 小集団をとおしての指導

教師だけの影響力だけではおのずから限界がある。教師対生徒の関係では解決できないこともある。そこでソシオメトリックテストの結果から影響力をもつと思われる生徒や、彼が選択している生徒と同一グループにし、安定した気持ちになれるようにした。リーダーに対しては彼らに対する態度をそれとなく指導し、校内コンクール、班活動をとおして彼に仕事を与えるよう働きかけた。特に清掃や係の仕事をとおして点検活動を充実しお互いに注意しあうよう指導した。

## (3) 教育相談をとおしての指導の経過

対象生徒との接触を多くもつことが解決の糸口になると考え、チャンスをつかまえては話しかけた。

4月 学年始め係決定のとき応援団員をかってでた。しかし、他の生徒に仕事をおしつけて練習に参加せず非難される結果になり、1か月位で応援団員をやめるといだし全く参加しなくなってしまった。1週間に2日位ずつ学校を休むようになった。理由をきいてみると腹痛だという。休むときは必ず連絡するように話す。4月下旬学校の前まで他校の不良生徒がきて彼をよび出す。幸いにも欠席していてもあわずにすむ。あとで話してみるとたいしたことではないといいながら、またくるだろうかと心配していた。

5月 時間をとって面接を試みた。学校はおもしろいが先生がきらいであることをうったえ、家で口げんかばかりしているのでおもしろくないこと、自分の仲間のKは相当に悪いことをしているが先生は知っているのかとか、おれは本当はあいつを信用はしていないなどと話す。また母親が出てゆけというので家出をしようとしたら、あとでさかんにとめるのでさっぱりわからないなどという。親の気持ちも考えるよう話してわかる。

6月 女生徒にさかんに悪口をいうようになる。中旬に父親が死去、おくやみに行くとき父親の枕もとであぐらをかいている。あまりにも気のなさそうな様子にがっかりする。しっかりするにはげまして帰る。

7月 班の組み換えをし、気の合う生徒と一緒にする。夏休み前岩手県の兄の所へアルバイトに行くので学割がほしいといってくる。夏休みの過ごし方をよく話し合い学割を渡す。

9月 教室内でひどく落ち着かず、反抗的態度を示すようになる。かってに席を移動し、テストはカンニングをするし手がつけられない。話し合いを少し避けるような態度を示す。

10月 文化祭にそなえて習字の練習のとき、大変元気のよい字を書いてほめられ大いに気をよくしたらしい。聞いてみると小学校のときから習字は好きだという。下旬職業相談のとき給料の高い職場ならどこでもよいと答え、態度がなげやりであったため安定所の相談員に注意される。何回かの相談の結果やっと鉄工所へ就職したいと答える。

12月 O鉄工所の選考試験をうけ、日当、旅費、昼食代をもらったといって喜んでいて。採用通知をうけとる。学級会でビントはずれのこともあるがたまに発言しみんなを笑わせる。学校内でグループで



話したり、かたまっているのを見かけるようになる。グループに注意して観察をつづけることにした。

## V 結果の考察と反省

### (1) ソシオメトリックテストの結果から

(表3) ソシオメトリックテストの比較

#### ① 7月実施

SSS	下位 集団	番 号
15	I	B12
14		B19
11		B2
11		B4
5		B11
10		B15
-4		B1
<hr/>		
-3	I	G32
-3		G23
-3		G38
-6		G27
2		G34
-18	II	B6
-33		B13

#### ② 1月実施

SSS	下集 位団	番 号
17	I	B 9
16		B 12
9		B 2
9		B 4
9		B 16
7		B 11
—19		B 6
9		B 20
—20		B 13
8		B 18
<hr/>		
—4	II	G 31
0		G 34
—4		G 23
—1		B 1

。学年当初に実施したソシオメトリックテストの結果では学級のほとんど全員が1つの集団をつくり、NとKの2名でもう1つの下位集団をつくって全く孤立していた。Nの横暴ぶりに反発して他の生徒がひとつにまとまってしまったとも考えられる。第2回の結果ではK(B6)、N(B13)は下位集団(I)に吸収され、男子女子のつながりが変わって女子の大部分で下位集団(II)をつくっている。男子の方はまとまったが男女の間が少しはなれてしまった結果になった。

(2) 教育相談をとおして、初めはほとんど話してくれなかったB13も、2学期の相談では自分の家庭についての不満のべたり、クラスの者は自分のことをよく思っていないとい

う不安な気持ちを話すようになった。強い劣等感をもっていた最初のころにくらべ、文化祭のころには習字に赤い紙がはられほめられることで喜びの表情を示すようになった。しかし言動はいいかわらず粗暴でこれらの指導の困難さを痛感している。

### (3) 学級での指導をとおして

対象生徒Nとの相談と併行して、学級生徒との間の気持ちをほぐすよう定期相談やグループ活動をとおして指導した。しかし一般生徒も彼らから受ける被害意識が強く平静に対応できない者が多い。結果として1部のリーダー格の生徒だけに終わってしまった。しかし各種行事を通じてグループの一員として活動した場面もあった。一般生徒の生活ノートをとおしての相談活動はできたが、互いに協力し合って班活動を活発にするとところまで到達しなかったようである。

Nとの話し合いを深め、小集団の活動をうながすことにより、一応グループの中にひきこむことはできたけれども、そこにいくつかの問題点が発生した。

① Nの属しているグループの活動が質的に低下し、また分離してゆく傾向がみられたこと。他の生徒の中の根強い反発心があるためと考えられる。

② グループで行動するとき他の生徒の中で非常に影響を受けやすい生徒がおり、態度、学習等にマイナス面があらわれたこと。

③ 学級全体のまとまりが変わり、下位集団が分離していく傾向があらわれたこと。

以上表面的にあらわれた問題点であるが、これらを解決してゆくため、いくつかの方策もある。また、表面にあらわれない点もあると考えられる。いずれにしても彼らの指導には、心の底にある暖かい思いやりや、理解が前提のような気がしてならないのである。